



蛸

乃

系

花

合

15  
327









に心ふらぬぬるかき了書とめてぬえ塔の糸  
巻と身て足きりれい理高翁の習うけりぬ  
ていもむき一頁校書と流と目一冊本の生れよ  
只一年の多むいそりまかたよ八十近く成ぬま  
ゆりくならうく世の多もまのりちる  
あちしてむとる忍と一洞もきくまるいあ  
れりて多くらまき一巻よあへりりる  
祀しこころわるふはすひんせにそ多くよ  
ふとせりしつる

弘化三年の夏 七十九歳 高為老唐



叙言

高海彦磨大人におのまゝ見たりし碓氷翁の筆の寫り  
おとほしきものなりしはるお書の益友ありされおのまゝも  
また平琴の供せりきておとほしき書を讀まにれりし回を  
奉りし茲に廿余年程名のえぬ松尾をもちきり小  
人一日大人を侍りし時一冊をよみて讀せりし  
筆よりしおのまゝなりしなりしは神代の餘波と歎  
て大人のお書よりしるむりののちお後へ換りたりし  
のちおとほしき書ありしは後へ物ありし大人ら







百按曰本文に朱書の照寫の字ハ唐爲の字也  
標記ハ爲の字及カク上

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

茶番

うちま賣

オニヤン

女坂の始

中洲の仮宅

十八大通

墨江の知針

妓 風

娼家横考始 文墨の名家

白猿の質朴 鼻試袋の始

菓子の変格 天師の始

琴曲の変格 料理茶屋

かくし賣女 疫病

市中灰多 行人坂の大火

白刃仇と斬り乞食鐘 旭子拍古 朝多

天鼓の妖

火のり

うちま賣

市中の人数

賢臣奉り

永代橋崩落

貝も極

天心中戯作若馬野吹傳

草子うー 菓子







神田小柳下子住  
生花の師匠其母  
可医師某の娘  
又あり名を松と  
云一由り改め  
やり唄子と心の  
底にあり

茶番

おの道京山、明和六年己丑の某の生花を天明元年  
辛丑十三里奉りて今弘化三年丙午されハ物心もあつて  
又少シなるも心の底子多もちたるをおもひ出  
され天明元年の十二有今弘化三年丙午ある惣乳を年忘れ  
と茶番とありありし小窓ハ大衆の万習居立或  
ハ権助の歴々あり茶番の歌ハ。鬼子鉄棒。二階  
切了目某。猫の尻へ本榎をとり下卑俗の後之は比糸田  
田江位一たる生花の師匠門人の小娘を強淫して淫

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



門を破りしより起りて獄よりしる巻説雷田の次  
ありし是れ彼の猫の鹿さいつちと云歎と強強の了る不  
熱向したるは時より少廊のたのこもち若きりし一丑町  
と云し若くは猫の頭と云たる皆家の命したる也  
扱茶番の目の昼七ツ以吉原を猫連れて来りし虎十  
四丑人廟屋松葉屋下る屋敷屋敷と云く丑町が世覚え  
こそやと云多る屋敷解して来りし石橋にひはれしと云茶  
番行の家の門を廟中の姿のまゝある虎も入らざる已  
れ十三の時目のまに又たす此時あるまはかおある出入りも医者の也  
此時向しく茶番は物と虎とも共に門を

介とき扱猫の茶番に成りし時丑町坊主ののほろと云ふ  
り猫の虎と花と云ふしよきよと云ふ強強よおと云ふ  
とはる時十二三人の虎出て丑町を打たき来りしつひ  
し、裸と云したる時張子のさいつちと丑町拵出りしとこ  
し、早にけける虎丑町の鹿と云ちて解つくさきと云ふ  
は時大少の敷をうち三味せんしと解つきの吹をうたふ  
皆廟中の奇妓ありし所、餅の身振りと云し、て笑  
をとり虎ももに米の粉をうりつけしれ笑の中にいれ  
られ虎ももに引つとてして平屋に入る一座絶倒せざる



前―扱五所かぢちと改め出まハ端とく大なる三方へ  
蒲包ひらふとそ修らる煙草入用―在る留へま  
せらと入まうち遠はとちつけてさいつらとんせたるも  
大三方へ積と―と子まで其所の上にはは何様ハ茶  
番ありと面白く口上さのへ三方ありと惣茶物とて連  
中へ先子六くせり程中におも―ち―とおもひて  
おもひてさるもあれとさかとのとて祀ま  
は席中の酒池肉林ハさるさる子ハ躍り子と唱へ―  
叶哈の藝者とも十四五人兩を揮る鬼子金持と子  
歌の茶物―當時布―鉛の延べの森さる子席の皮の

煙草入人茶番の連中多かり―故夜明けた事と  
も元を開りて燭を―茶番のそ―ハ輕五ツ  
びあ―は―るりても天明の時勢を志る人

うちほろり世 扇を買 いろいろのあり

かゝる世の中あり―と控古質の強うか多かりも  
ありは只ハ今のおく御店を錦纏の氣扇ハ稀に賣  
もつりりまとは―くお勝見えさへちられハお扇を  
物つれハ脊原ハ此に通―たるともつれけ



司人志ぶらり。あつうち。さう。うま。め。お。く。  
うら。いと。ひ。て。賣。り。あ。く。大。方。の。若。記。二。さ。い。松。多。  
錦。飾。の。當。處。一。下。十。六。文。人。氏。爲。末。あり。と。考。へ。し。  
風。も。二。枚。張。四。十。八。文。飾。の。立。本。に。比。多。居。派。下。回。の。虫。  
雲。の。舞。飾。の。お。い。う。よ。も。料。末。を。飾。之。お。の。ま。の。ま。う。七。  
ハツ。の。時。人。安永四五年  
安永九改元氏。後。十二。三。の。比。天。明。元。年。の。つ。た。う。  
て。字。風。と。唱。へ。て。龍。南。在。の。字。を。雙。鉤。字。の。次。く。  
と。藍。又。へ。家。を。毛。も。う。多。う。を。取。し。と。一。室。と。一。て。た。ひ。  
ら。い。の。の。字。風。の。下。お。と。し。て。子。供。ら。の。を。も。た。又。扇。

初代市川門之助  
云一尾役末扇賣の  
狂言志多うり

市川門之助  
幼若并流

市川界女藏  
幼若并助

市川門之助  
幼若門

賣。と。し。も。の。あ。り。う。扇。の。形。一。た。第。を。つ。く。つ。も。重。  
祢。乃。を。扇。の。あ。り。あ。り。と。と。を。た。う。く。牙。姿。ら。  
湯。や。の。た。は。白。き。強。中。志。へ。た。志。と。う。あ。り。た。あ。ま。  
あ。ま。た。る。男。あ。ま。笠。と。う。う。の。唱。入。連。の。地。張。を。三。色。骨。  
を。み。せ。て。座。を。あ。り。て。う。う。之。四。是。正。徳。の。遺。風。系。  
り。し。の。實。政。よ。つ。た。う。て。多。え。た。う。

工。せ。う。り。さ。ぶ。き。い。

同一の餅米を以てよく煮たものをせといふを  
八必年始めの蓬菜に一家毎に志くうり成り故大晦日の



明布のしちをせやせり上賣行りくおるとまめきて  
心とらうしも今ハまかひ  
甲一尺二寸引とて宝引の糸を指物よりさくし  
も紐を入きあし糸一筋の價も紐の上れありま  
は依て多下あり書きハ隨之の糸一ツとて是は宝  
引いんかりもさくしあはせり立てさごさいくと  
哭ともはあをまけハ只の子むかをさくしは宝引大  
方ハ松の内を盛と一十日は止む新春の日の糸  
物ありしハ寛政に禁令ありて声あり

### 女髪結の起立

再按山下金作  
宝曆七年始  
下り安永ノ末ハ  
二月下也

安永の末山下金作と云女形下り澤川の栄ホと云処ハ  
佐其崎崎の正且<sup>今ヨヤ</sup>之まは考のつりはけは髪結の  
髪子通しかりしハある日ハ妓の髪を屋作のつり乃  
梳りわひら多を妓輩うしおみ指物を結りておきせらるに  
后ハ一面を紗の深と云めらるハ結は多女多るしハ  
かつし竹をわめハ妓の髪を結しを悔せしハ其者  
ハ若き男成ると云ハ一面を面文づりハ妓家の仲居と  
もハ髪をわひら多るハ百つハ百夫と云ハ髪ついにハ名と











女子のまゝの水溜りもあり、とてお中梅を那う  
るすう、その足世物芝居のあまをそれと亦足踏ハ  
一人五百細人、是を鶯市、藝の女を走る、此は  
市川八百花とて婦人、日ハ舞き、ひつさる、立中の  
うは鶯市、常もとく、似たり、お人、顔をつくり、衣裳を  
り、その声、多をう、えハ、八百細人に、あう、か、一、是  
鶯市、もや、り、一、知、三、之、を、以、所、の、藝、は、て、お、ま、と  
と、は、物、づ、い、物、諸、の、扇、の、多、杯、氏、お、ま、く、の、ま、を  
八百花、常、人、仲、為、お、花、南、と、坐、里、好、女、又、出

中役者、延も、平、東、ハ、毛、ハ、ま、う、あり、顔、つ、き、身、を、り  
それ、う、つ、ぬ、う、と、同、を、ぬ、く、上、斗、り、あり、四、と、也、始、り  
常、お、ま、の、非、人、ま、つ、か、一、ツ、二、ツ、あり、お、鶯、市、出、て、一  
藝、を、お、ま、一、是、を、お、ま、幕、と、て、お、出、に、下幕一人  
中、演、あり、一、以、ハ、五、丸、花、句、と、り、夜、を、せ、あり、ま  
鶯、市、の、お、足、世、物、芝、賣、子、燈、籠、然、う、る、中、は、か  
の、四、巻、庵、ハ、お、取、横、扇、を、お、ま、ト、欠、少、廊、の、唱、お、ま、  
ハ、一、と、一、飯、堂、一、と、夜、足、世、の、娘、ハ、天、以、仲、の、一、雀  
親、筆、一、と、何、も、は、く、一、一、九、一、様、七、八、十、の、老



人丁存了

此時丑の後に多移の大家茶屋石橋より  
をりて抱の榎女斗ハテにて若を速し

因り了花街焼元八の曆の大火元吉平野焼一して  
同三年新吉原に移り十六年立て延宝四年十二月  
七日江戸町二丁目花屋といし抱女屋々出火一廊焼  
焼元は時辰宅事一以後九年三年立て明和五年  
十一月七日延宝四年江戸町二丁目四目屋と云榎女屋々出火  
一廊焼元辰宅始て新吉原の江戸の橋場。山谷の島  
神代店三年立て

明和八年四月七日揚屋河原岸梅屋焼女事  
出火辰宅事同日一十年立て同辰年二月廿九日  
此年の秋は目黒行人坂より出火南風焼を平形  
安永と改元一廊焼元辰宅。東西邊。深川平屋十七年立て  
天明元年己の九月晦日伏見町東田屋焼  
火一町焼元辰宅事一四年始りて  
天明四年辰年四月十日水及鹿秋葉常焼始り  
出火辰宅。東西の並木。駒形。黒船町平屋四年  
立て



はし子蜀山人が  
みまの鳥居  
のわがみま  
くてのむら  
はし子蜀山人が  
みまの鳥居  
のわがみま  
くてのむら

天明七年十月十九日角所より出火火元  
飯宅。大橋辺。深川新代。田橋。中洲。高  
橋。以後八年たち

寛政六年四月二十日江戸所より出火  
飯宅。田所。登天町の山の宿。尾町七年たち

寛政十二年二月廿三日田南徳泉寺門前出火  
飯宅。同所十二年たち

文化十三年五月三日京所の娼家池光屋より  
出火飯宅。同所。以後七年。延享二年の夏。堀江

今の耳目も、何れか、その外に、

十八大通

元禄の氏紀伊田也。又在橋の同屋。東八丁  
堀一丁。跡は、古橋。田所。大慶。高堂。を撰に。名は、  
地文と云。今も、田所。人口。子。徳。泉。寺。角。の。門。人。を  
撰。名。を。牛。山。と。い。う。氏。角。也。元。集。子。山。の。宅。を  
と。云。句。二。三。等。又。人。たり。地。文。も。と。也。在。堀。越。の。夜  
花。樹。は。あ。ま。ひ。て。豆。の。中。へ。小。粒。金。を。交。て。豆。の。中。を  
一。た。り。す。口。碑。も。つ。た。物。の。あ。り。も。み。ぬ。  
委。密。の。家。先。碑。



富平傳説の近世  
紀文切なる素後工象意を破く  
年澤川一の多居のありし作りに波せり  
俳偖の宗匠某紀文の作を  
の天井残強してつりし  
張きさしる時理師云々  
満やくんつりし物文のみにあけりたる人  
天井を張たる紙を升るに  
の紙ありしとひりし  
るよに紀文零片にして  
ある處も又えたり

一神以て盛なりし時を  
いれくありしつたかく  
病阿多者黄金湯を用ふ  
沿一がたつひま破然  
川柳点のりよ  
とま  
いそれ  
者を大通又八通人  
子行る氏中も十八大通











たかりし故二人の短冊紙を様中にも贈りし是れ  
の祝ひなりしきき 娼家ありし小聖河よりきて大衆  
とありし、とそ天明の比初代花扇東江のつ人あり  
逆聖世よりし強中より見ゆり 稀名の類より自毫  
のしみ奇乃ありし 甲一時同家の澁川の子落つ人  
ありし落も東江も天明中の名東江にこそ通つ  
人多しなり 初代聖河の二の斗りたを成づり 志すおしよ  
由聖河の斗ひより一月一面つおしんと稱する者  
客の多ぶよりし 小<sup>み</sup>位を付け 保名たさし 小<sup>み</sup>知る

に澁川客の敷花扇ありしとさるる多しけき  
平店の時位より 早をあらしと澁川よりしなりや  
り 花扇表座交澁川花扇表座交澁川  
東座交三つきあり 形なり 怪きありしを 小<sup>み</sup>せや  
使ひしとさるる如く 今のは表座交へありしを  
引違しとさるる 小<sup>み</sup>花扇へありしなり 是は  
澁川より不足しと 懐存し 初代精を出し 是は  
女妓一双の環光を解し、とそ是を見り 自毫の信  
ありおもしろし 量ありし 故家を起し 片ん  
是れ一代の盡ありし 小<sup>み</sup>祝ひ 是を建し 店を扇



の風ありやありや

妓風

天明の后二十年斗文化の比事をおい之と稱せし  
あり大方に横兵庫とて髪の風ありしと近年  
は風たんとむしを矢のふさうさうかんきく昔  
よりきうて大まふありしあり天明の比はうらも細く  
わらけありさきハハの如く馬蹄ハ既下のせまき  
女の髪の結ハハの始ハ。座輪。千店。兵庫次ハ  
高田次ハ。丸曲一名掛山次ハ。志ハハつけし沿革ハ

余々歴世女装考ハ宗説を奉て能ハぬ近に  
上梓也

娼家子様号のけり

娼家子様号地付けハ五明様あり

鹿屋五明ハ  
扇の吳名

墨河好子ありし故様号地もつけしと目録ハ

鶴立様丁子ハ鶴立  
丁子の漢名松屋を松屋殿とてハハ今

古ハありしありつけしありハハ玉屋の

玉様ハ玉の字うごけしハハ近來ハハハハの様号

阿多の中にも大黒扇を甲子様といふ也。五明。

文化の比事ありてハ  
深川新地ありしハ  
岡橋地も大観  
様百五様杯似ハ  
好まきを和料  
理茶屋茶室や  
と借上あり世とあり  
ぬ



新舌。松葉の三折ハク九文ナキト。糝。玉糝の  
光り細う。一あるハ古ハ代ノ主人綿後ヲ万子素を  
つとあると。少以茲光を失ハスル人返々も今い  
ふ世ハなくハ亡先妻多あり若人ナキ。禮也  
一懼る也

文墨ノ名氏

比三并規和  
高名有ハ烟草  
入女帯ナシ織  
抽ナシ浴衣ナシ  
衣と澤物ナシ

天明を盛ニ歴ル者家儒子。曲山 小嶋の二家ハ  
在ナシおくる  
信ハ西野 市川ハたノ門  
米庵の義 和奇ハ多。蘆。青楓古家ハ  
秋和。東江。耳竇。淳信。画家ハ米谷石唐淳世

綿ハ小尾重政 書也志舊の 綿川春章角力。谷風。

小野川。樵女子祐扇。遊川能優子。島十良樹。中村  
仲翁狂奇師。四方奇良 山人。蜀。東雅漢江。元ハ  
亦阿弥。大屋裏住。麻律部高龍。右屋取盛。瑞屋  
金持在。いつまもおのま。十廿六才の時尺竹の名家ハ  
文墨ハ人々ハ亡先ノ有ナリ。故余も中尺尺ハ  
容貞ハ於目ナリ

名糝ノ質朴

市川名糝ハ。世木抄所産。春和云。岩後ハ







赤部おのまも志丸く白猿を尋し時仁像あ  
て白猿有を每人ソガうとひるまに白猿うちをみ  
つはあ人根とく己仁像へあ残に死の内ありと  
答へりれは每人ハさうありおのま連う若かりし心  
丸おもしちく受へるを、己仁連は此時天井子  
井をわたりひるまたる藤原のせりありしを  
志部有りれは白猿曰風吹ハ視よりありおもて拍書  
ま行しあひありは藤原ふつきて相争あり先生  
いあり人なりと

天井をひきハ嵐うわくありまなまらしむ  
ありや

是等の凡魯元政の崩れありて俳優ハおし  
人抑あり隠居の雑費一月に金動分つと定めたる  
をむきあかおくる芝居屋の  
妻白猿の  
実子ありしハ魚類カも  
おくるあひふたしとおもくする那ハ老なる後若  
くもこの私の根に世をすつれは隠居ありまににお  
るハ根まをさうあいつまも顔をぬくハお那  
時の咄しつは白猿の谷をつぎありし今の白猿







ウシノ有るまで鼻袋袋と云ふ物ハ余亦入り物後小  
すしハ室水の以てりのおよて十年百四十五  
絹もあれ亦綿もあれ四角子のひんぐさき  
紐をつけ内に連申甲の物をいれしを鼻袋  
袋として妻あまに細工させ今のやく天竺と云ふ  
残袋届といふありしと云ふれし物煙草入り  
余の幼年安永の頃の今の鍔袋□の形も皆云え  
せりけり表に似た山形綿裏ハ黒縹子襦袢甲力大  
けせかけあるを上取り物として人にもよきとして

雅楽云

第の仕立上首を  
越川公けとして居る  
のまはるは家起立  
なり江都の俗  
川人けといふ

尺三程あり儼ハ丑父位ありし安永の末の尺  
三寸九角七角あり出も宿あり張の横鉄と云ふ物  
を作りたるむろの形中ハカカト云ふ是今  
り少のありもの起立形又ハ同家完後部形と云  
たそと入をさしむ□ハ形今ホのふる天竺の以りの  
通人も張の横鉄ハ後部かなの煙草入りもたきま  
形一寛政より玉りて今年津草田系町も越川也  
といふ袋物もて也なり出一懐中物も一層の袋後  
を増せりは店中袋も礼巻もとりは也と也



けしむる物のきこさうつし後せたるはみせふ  
権ふと

菓子のお格

天明の修風あるも未だ菓子ハ後ト云キ人ぢうやう  
らんを最上と云たる常儀一名を仕切場と唱へ茶席  
にも用ひ通人の符みしたる物形も今迄菓子や  
おとあつておつらあひ又らんお人のつゆしきおの物と云  
ぬ志らる菓子追々嘉徳よりけり寛政の始大久  
保之水の菓子杜氏のたて嘉徳御といひし者日本

橋の折居の小家の表ハ格子作りを妻婦子丁雅  
の百仁一人のくくくを自ら上菓子がてあつた  
て賣らるに練羊羹といふ物を製し始り今今の  
やうにきおるとくふものもあつたハ口を愛する者  
お花もたせそふふやうふりふ賣切たりとてむか  
しくくくるさふお花と云練羊羹のみお招きたる  
客を之と云程の珍美と云たるに今ハ徳田もある  
中お日光形も江戸はまきまき僅に五十年の嘉徳素の  
倣りしる菓子はおいともかくのさし



てんあぶのちりきり

天明の初年大坂に家僕二三人も住ぶ商人の次男五郎の奇妓を誘って江戸へ逃来り金の位一圓の裏に金目金目利助と名付出入りしる事ある時亡き下りし大坂を引揚と名付江戸へ胡麻揚と名付引揚と名付魚肉の抜け力の二入出りし其のち此の是を夜をぬけて賣にせしやとありの先生いふ兄曰く此の事おれはつきあつた人徳むしとて係りしとてさせり

にいつても其味あまはく賣所とて此の先生  
不利助曰く是を夜にせしとて此の先生いふ魚  
乃胡麻揚と名付すはあふしとて人物をよく信ずるも  
あつて先生名を付てたすあまはく云われハ亡  
きとて考ふ其証と書ておせられハ利助は  
人の形をてんあぶとていふ形をいふれとていふ  
亡きうちあつて且下ハを矢笠浪人ありしなり  
と江戸へ来りて賣始る物に人ありしとて天  
竺あり即揚と名付しに其証の二書を以てし



牛説実子傳り系  
如きは、約燈子  
本胡麻揚とあり  
一あり

小麥の精のらまの世かくるこつと成りて  
たむしき云り此利脚も酒後なる男は天竺派  
人のぞうはもあてらんぬ、面白くそらんぬ  
みせを歩たときあんとんを移来りて字をよみ  
ける所を乞余の字を命一のあてて六已十二三の  
比をそととり六十年のあつてありて天賦雅  
乃若く文中も悔内子懐傳されとも之を京傳  
爲る名付帳を予り天賦雅のり煙を書きて、此  
利脚の賣強く、六知人あつて、此はさきハおの

是増修し、たろ少越雪譜の二編越後の小谷コノヤを  
録のそんを念し、たろ案下をもつておも小  
お乃始原あふたハ、あうあうあうあうあう

琴曲 奏指

追古の琴曲ハハツ橋檢校一奏し、明和、小生田檢校  
出て二奏し、世上の琴声生田派にあり、さるハ、あく、予  
姉二人も生田のつ人あり、おと、明和、小生田檢校出  
て實政、享和を盛し、歴々、好辛者あり、し、く、  
に風雅もあつて、文墨の名家あり、文り、自作の







後院より一とて深草の茶亭と云ふ  
り一とて一近寺の双紙と云ふ  
市書とて折出  
互に建とて名子  
けきてあるが  
けきてあるが 都下繁昌は是にて遊食  
店多くあり一中小明和の比深川洲等に外屋  
後阿弥と云ふ料理茶屋亭とて割髪とて阿弥  
とて小名をつけ一京都丸山下倣ひたるなる一  
此老夫婦人の機をみる方巧て志も好むあり  
一故を住居二間の床高麗縁をけ一作り八側  
付を廣座敷とて二ノ間三ノ間小座敷園中の小

亭又小軒茶屋鞠場と云ふあり庭中一推しと云ふ一  
雪阿の比隱居南池殿田くは当るの中次男雪  
川殿と云ふ一童子遊ひたり一此高殿ハ平氏の太  
名ノ通人あり雪阿殿のかく一紋川はこしく川と  
り少なき御縁名何るれは指着と云ふあり外屋  
後阿弥件のとて大谷松徳家の名者居富高  
の振舞と云ふあり外屋を定席と云ふあり  
繁昌と云ふにへりあり一廣座敷に望陀寛乃  
三ノ間を精物と云ふ一地ハ不毛振蕪四角と



象眼のツギもの大書六尺斗り裏書漢文を  
 南波子役所へ賜ふ故由一百字斗り記し  
 あり鳴鶴盤唐の官圖も亡き時ありは款近き  
 質の流きを買しとてある人の家より見し厚  
 少ハ今の白猿下なへるといひ天明小磯せ  
 己の通人々遊子料理茶屋 葛西太郎 隅田川とて秋  
美行く堤め  
下り口今ハ  
平岩 大馬屋強口而 同外  
秋葉 甲子屋 志  
寄 二軒茶屋  
深川橋  
境白 百川 室町  
橋下

かくー賣女

天明中 賣人ありし土岐の賣女。根棟 二条。  
 谷中よりは孝也 二条。考羽 二条。赤坂 二条。氷川  
 二条。市谷 八幡  
社内 二条。橋所 天祚 ツギ  
ま。大久保  
 志くく谷 切足世  
二条。下谷柳の橋 四下  
切足世。三島門  
赤川に泊り  
二条。游草 鈴 鮮 長屋 切足世。日所 大根  
切足世。日所 堂 切足世。赤羽 根 二条。芝 祚 明  
社内 二条 切 切足世。花 房 町  
切足世。三田 三角 二条。游草 三 二条。  
折女。五人



菊弱島八横堤  
七埋乃多那ハ  
成り不ふ  
舌の初く故子  
左あつけたり

子やく島 さい岸島内埋立地 二年の八所堀代地 堀まると  
上野下仙 在年堀夷合所 三枚橋東側けころ 堀二百  
はけ たろと 若美 はけ 深草 西 玉橋町 石河  
辺にころひ藝者と唱へ百足つ そ ころひ社乃  
抱席 し ころひのあり し 人 は 名あり け ころひの若  
遊轉 し の な ち は け し ころ は 抄百 洵 の 若 よ  
了酒 食 を 手 り ち ひ 夜 四 ッ たり 抄 本 あり 一軒子  
二三人つ 一 昼 夜 又 世 を た る 衣 後 ハ 縮 細 を 禁 一  
ふ り たり 必 守 墨 の 上 に 座 氏 輩 は 木 羊 座 茶 瓶 の  
女の姿 なり 下 人

は素毛 あ ぶ た 仙 店 ころ 軒 を 並 て 四 五 十 軒  
け り たり 一 つ し 人 是 利 の 道 が 目 隠 を し け し ころ  
乃 姿 錦 纏 ころ も 團 扇 ころ も 賣 り 出 し ころ を 余  
一 柄 を 花 走 房 ハ 珍 寄 ころ と して 賣 毛 の 藪 下 の  
麻 布 市 兵 衛 街 ハ 又 世 の 紋 の 橋 カ 又 世 の 面 團 回 向  
院 前 銀 猫 ニ 兼 回 処 辨 天 金 猫 一 分 の 回 処 お 九  
比 の 回 石 松 井 町 ニ 兼 の 入 江 町 四 六 の 深 川 仲 町 一 二  
の 土 橋 十 数 の 槽 下 一 而 ニ 兼 の 裡 や ころ 日 の 古 多 は 手  
日 の 三 十 三 百 堂 一 六 の 直 肋 扇 扇 日 の 入 船 所 日



細井場曰。古石場一切棄新石橋曰。新地曰。  
 大橋大橋以上三千石所出舟人等  
 之深川吉永河に軒をつゝ稼かるもの夜子  
 の水ハ船に即しつゝ乃せり所と川流あるハ高  
 浪船子免をとうる上下あり。提筆相賣女し 能なる  
 上下あり。地獄の夜鷹  
 右進々大元々々依然たるハ小廊ハ  
 石川。新病并。夜鷹の  
 疫病

安永の二年夏夜初涼力死乞多ク一ハ  
 幸院へは行舟一ハ夜死十九万人葦中  
 人以上病者稀キ一ハ細子多ク一ハ  
 同三年乃冬嚴寒之川に氷厚く通船者甚  
 く諸事多價  
 同四年凶作  
 同五年麻疹流行三年以下の人半死と云く  
 病者ハ形  
 同九年夏洪水米價 半躍也



同九年五百羅漢寺螺堂建つ 安永終る

市中灰雨

天明元年田沼侯中老穉 日終る

同三年關東飢饉 下二ヶ所を記す

四年七月六日夕七ツ中灰西小の方崎初徳人行を冷き翌七日 於甚しく江戸中子灰雨是海戸山の焼灰多形 以時雨の連十丑才あり六日ハ時多しぬ水風烈し 以しぬ居根多しに灰の雨 中を人へ灰も何にもに風塵とのみ尺半

一 子六日の夜中積りし灰を昔の朝令を愕然せざるに奇しおの道も破新の塗ぬれを物にへ志をくし出し玉なるを灰の指既を字を書て紙しに雲のあつく降たる如く 家内うちとりし事なるをいひて天変も如くし 王祥多上京器いひる根室永四年不二山焼たる時江戸に灰の降りし事有り 時崎動しなるに奇の方あり此方にありて江戸近き高山ハ海戸あり 常も焼る山ありてハ海戸の大焼を人



とつれらるに人へ去りともおもたに日一日往  
来もまき那う八日快晴子向所も障りも徳人  
安堵——るに也往系常の如く——乃日の夕方亡兄の  
友あり——伊幣下力米河屋下子也兵右工門うを  
男斐太郎とて之落翁の書も奇もつ人ありき  
かり上河とりの書状ありとして尺せらるに階百九  
焼く——のく灼然かり言え家翁の推量の遠く  
すろを感伏せしれき家翁の享年保七年の生れ者  
君八近き室永山の焼を扱ふ方の話——もすけ

あしん

比一乗と書つてやいふうもむやう大馬の光と  
論する是うききと卓識ハさきありお——く  
るおの多程をききたる老人ハその実地を  
清く感懐——なるる多々あるれハ一言入下りも  
味ハあるる多——すまハ老人の初ハ馬耳す  
へう——に終るも老人を懐りおとさし  
お——むれとて流りとしてハ三十才の人ありハ  
相心を覚——僅ハ十年の世を歴て六十年七十



年の世を歴たる人をおしむる権威相衆  
を志す事ありしに子なるを踏まじしも相衆の  
とありしに其のま犬馬の老子かくりしに  
おの思引米くまのやうな道と衆人のありしに  
あまも流りしおくれかりしとやん

乃人坂の大火

明暦三年丁酉二月十日出火同十九日の夜火志づ  
かりたる以て并に焼死十万余人を由所子埋め  
常念仏の庵室と云ふ建たる氏に一をともハ武

院を以て此未だ有る橋ありし火を移かる者

大火后二十七日なりて天和元二と打つきて大火あり

りしに天和元年集 撰中一巻ありて得

たりしに天和元年集 撰中一巻ありて得

て天和九年の年なりしとて 雑説ありしに

午の上刻日其乃人坂大岡古の所化と云ふ所坊

と云ふ名せしむる一 忍僧 師 匠子つさか

と云ふ名せしむる一 忍僧 師 匠子つさか



うらむる子ありて物死く所子火を放し二百二  
吹く火消るる子目黒に子孫ありて今も老説子  
他焼死四百人焼死の地  
里敷三宮恒一里七六里

白刃仇を斬る

天明四年の春米價も澁同年三月甲子日  
奇兵退出の時新田番佐野善左衛門田沼山城守  
反を斬る翌日死主取大目付松平右衛門佐野を  
斬るは目付柳生之儀正取佐野の血刀を奪子同  
甲子言山河下弦弓反拉使子より座敷庭上より

切腹家断絶又主取死に言返りて常の如く初任  
主取取死に子ありて後子孫を佐野取に潜草子  
取内徳中も小蘇古香花の人半踏老若  
群をせりて年おのむ十六才柔術の師中野犬  
左子門照降丁子隨ひ徳中もはよりし子先門  
前小庭を花線香を賣所言所門子入れハ  
四斗樽に人をたぐハへて手洗しめりけしと一鉢  
をとり墓子に花をさす其の如く地上は線香  
煙し人を遊ばし船集開帳場の如くありまかくあ



りつる故に多勢ありの合して余詣を禁じ  
一故門を度々に夜中竊ひてく多詣せ  
一やをばく群をあせ一由依柳を白刃を揮  
ひ一重日とく言ふ事一米俵係下差せ  
故依柳を世草一大明神と市中に唱へ  
あり是地妖ともいふべし

乞食鐘燈の拾

此故非人一人ハ七ツ桶の酒樽の蓋を着鬼の面を  
叩き田沼の奴一人ハ靱藁の蓋に鐘燈の面を叩き

張張たる鈕を指鬼を遣ひしわ一竊ひ依柳のよ  
仙を叩いて街上を叩く門に踏をくし  
葉一あり門毎に踏をあたは且余が足踏あり

朝集

同日午乙巳六月嵯峨秋廻四向院に閑帳群を  
あし朝集の志すまのちのみを叩く挑灯  
を高くして一夜をさめて群集あり是を  
て尺にりも有る茶をけ賣登子すま  
は年例より大黒あり一由へありさまハ新穀



よめて人安うりり

天鼓の妖

元日四時より日蝕  
の如く後六時半  
登城す早く登  
城しなすは小退  
ありて下馬の  
供待の土蝕は  
なりて氣絶せし  
人二三人ありと  
明事二天明六丙午元日も丙午の日蝕皆此の形  
天災也あゝ人と徳人安記の形ありしに神妻と  
雷もあゝさる聲天子ありわ子守りとありて南  
よりあり四方所を移し昼夜定むに拍去り人の  
天鼓あり人といへりありて少子明の英宗と天鼓七  
年癸未の年天鼓の妖あり時子賢臣李賢凶作  
ありと評したりる明史子尼の果して同年

より大橋君は名例の八月廿百田沼行從殿を削られ  
減地一百石鷹ノ石詰居屋敷三日の日に瓦拍ひお良城  
中<sup>城上</sup>に<sup>城下</sup>同時箱巻熱中<sup>中</sup>を削られ城  
地三子石

九月八日薨じた善聴あり十月早は出根  
同日十二日何夫の落言も也由木乃不毒行  
と流傳して市中の強劫云へりて愚人懼  
智者ハ笑へり此妖言江戸中一時ありき  
此時おの連十八ありとく受へて一八家翁







どう出火西中の風烈しく狂玄由産焼亡小  
馬谷河東八濱河山伏井戸の辺に消火は  
北三西久保残屋河より出火中風烈しく田  
河渡者もまやも同月廿七日午刻在所四首  
より出火全産焼亡まやも中飲は橋屋より出  
火中風より火粉金城より依て係小  
矢原ありて八重の火名并町火満を類火事  
同年四月九日光山風雪烈しく日光奉光  
天野山城等甚多より出火早一坊民家十三

丙午火午も火火火火を  
産する故に大火なり  
凡そ此層の説を  
洪水ありと云ふ  
しういふ

町焼亡江戸の甲申申を年々而も凡そ二十七八日  
昼夜風烈し所なく諸人多と東に火災の事かへ  
を多にのみ 此は町火満の纏銀高を火小二本を用ひ  
は実致し禁やと云ふかある  
同年七月申申より七月迄霖雨晴多日なく  
各段田の甲一諸人洪水をいそいそ果しそ  
七月の事稀多の洪水を種うまの増き甚て  
八十余村を流し溺死者多と云ふ深川大森  
河を漫し一家八棟をこぼし是處を通り船を  
通す大橋東橋も水で洪水を岩道も通







此等破るたる色々の漆小袖帳面の類やぐらなる金屏  
 風亦ありたる障子唐紙大家ありしに内へ見へし  
 くやうに張りぬく打毀しけり後日吹かへしめ  
 十四日人ありしに追て抄抄方より百人斗りありし  
 とそ日夜中。小細河の伊勢河の小船所。津田  
 内分。益家。湖草辺。子位。本江。市ヶ谷。四谷  
 同夜より翌廿二日に至りて晴近徳方の蜂起  
 米屋の間にありきとも富商人の手にとらえし。然  
 ましもの有令寂しして声ありし廿三日午刻所

戊午の町中奉行ハ  
 曲淵甲斐守彦  
 地天隔当炭  
 之石川土佐守彦  
 柳生主膳正炭池  
 田鏡后守炭山村住  
 濃守炭初麻理  
 河内守炭松平

奉州出馬並先自方十人捕へ方の命あり又  
 此陰中先死骸祈り及び言の令市中以下りし  
 故市人勢を以て木元くくメ切お渡しお云葉  
 をつくり互ふ切替の的をありし梅子木を急ぎ  
 せしむ茲にありて蜂起も又寂しして声あり  
 江戸開祭以来未だ嘗て有の事あり地妖と云  
 べしと徳人のいひりり伝ふ言ハ大高の関にたる  
 ハ大八車四日挺子大勢あり付撞き破り打毀し  
 たるのち酒食をむきありしが日類盗と事あり



なるハソといふ江戸ッ子あるべし一それとも蜂起歎  
しなる海に盗もあつしと我

市中の人数

旧正月の蜂起しは一日廿二日廿三日廿四日  
江戸中徳島をまわして業をせし依之米にま  
あつ徳人口用の果凡國をせし初て力をはひく  
町奉りし公命あつては赦し下 西衛甲斐守  
牧野大隅守  
四日市小小屋切り獲り場と長一人子玄米二石五  
斗豆二合五勺 銀三匁二分七厘小児七才以上迄と下

此所の家の人数を檢戸ありしと或記し

町数二千七百七十軒所

表名二十万八千餘家

市中惣人数百三十八万五千三百人

内 八千八百人男  
六千三百人女内二千五百人遊女也

出家五万二千四百三十人 一萬七千餘人

山伏 七千四百三十人 妻帯之者女障之

神祿 三千五百八十人

左ノ外は南邊町人能役者徳家の家業所住の



老陳三

賢臣奉命

おつく荒凶の富農とも穀を吐さば有柄も  
和易さるる似たりと違ハ國憐普り人そは  
年天正七六月廿日賢臣伊奈中老侍門時年の事  
人てら達て從五位下按察守に任は小姓能任子也  
穀運動の録目と命せられ米穀買入の金子二十  
万兩を下し玉ふ是他用を許さる市中 此秋の為  
あり余は時いふ九藩子入りぞりルれば 國恩の一

は老中上席  
松平將軍守室位朝臣  
曰は老中格  
本多璋要阿比留朝臣  
后不才席とある  
侍從大弼子進  
一白川為右衛門  
將三轉任あり

飯を喰いかへて拙筆も下流のいと悲なりあり伊  
奈殿也月とすて富農れ招きるに集り来り  
穀改大にひりけ時の九坊をて買上價を喊し  
上徳人より包たせ入るに後懐に感後して  
徳玉とて穀船日毎に入津さる船下伊奈  
の二字を降たり帳を翻せし依て米價出で  
引下け三月末より一斗八升の米七月二斗七升合  
八月四斗三升合九月六斗八升より僅に一  
二升上下して年終り万民在耀る者むむる



作て安きに在傳子有徳二方世繁くるといへる百世  
 八大教を了すの事と経子も之を宣百世の事と云ふ人  
 や蕩平の天運茲に循環して白河の賢君重  
 仁子座一を以て奸猾破れ之削りて是賢者擧擢の  
 時に遇ひ室曆以來三十年來後放の玉断せ  
 一洗一掃以て是天もまた皇兆と下一也凡十  
 有二月一也五教富饒万民鼓彼一て万軍を唱  
 たり

追加 凶荒年表、永代搦嵐

- 寛永十九年壬午飢饉 是より三十三年后
  - 延宝三年乙卯同 五十七年経て
  - 享保十七年壬子同 五十二年 経て
  - 天明三年癸卯不作
  - 天明六年丙午飢饉 四十八年 経て
  - 天保四年癸巳同 五年八朔大風而九月
- 以上一白米十賣百文一也今也夕 以穀米  
 每石五斗年春六斗五勺一也因不毛餘死多一



物多に江戸の窮民に菜色ありて一は徳  
沢子活ある由り新の作きありむるべし  
恩一日も忘るへし

安きに荒凶大方廿十年を一期と云ふ証を  
おもひはかりて飢饉の多きへいなりたまものあり  
一人三食の飯の一器を米につもして廿十年貯へお  
く荒凶の時一家安心にさきあり他人をいねむ  
りし是多きのさきもあはれす多きやも吉子居  
れは凶を忘るるあり安くしてあはれ人を写す

文化四年丁卯八月十日深川八幡祭礼の日朝  
日時は半重の空船永代橋の下を通りて空船  
多きも橋上人縄を橋のまじに引手張て人  
をとめけるに移りし多き礼ありて家万戸尺  
寸なく時は刻に四つ時人の盡きりて大方公  
以永代橋下かき物多に一糸の縄幾百人を止  
りし多き時斗りすありてひまき多き時それ  
通きし縄を引をみて数百人の強通る是乃  
力辭の重し教百斤の物をさうりもさうりかくあり



一板細き七橋いそたせりて紀橋の志中より  
深川の方へ十百斗りの所を三百斗り踏破し  
たれハソリて後さそ人跡の共ハかくとハ志す  
おしやく故おされて海へまをさるるきまを横へ  
むく居ち事橋の上ち建ハ差のやりに入水  
しなるも多うさべしは時一人の武士刀を抜て言  
くむらめりーはれハ是を欠て海へ逃げ入りて  
居を聞きかろは一刀を多くの人を助けり  
とんげふと世上さそあめけるうそ多そ子人子

何りーを今年迄早年居人を知らさるーは  
今年の吹春幽篁庵の席上話たりしおし  
おのれ及れり知を語りーは足かろと橋渡りといひ  
てかりやきて足かろあり  
は五人以松也十  
之冊也曰一刀をそりーは南所奉り飲  
田心海辺ハ右情門と云ーは老の人ありとすて其  
時子あひて早年志らさるーを察明しそ耳  
を新まきしは人おくハ狂人ハ溺死せん  
予量の善報とソゾー  
は時橋渡りーとまておの事通白岩子立て見



















居し其衣後止も心づけ終へかくてあり  
了り申年ありし日地中も草屋重三郎  
通油町系傳藏作あり  
上様一九月板元  
及世の書院引取ありし年銭や帳簿あり  
みせ付し。是は居し男年以てし帳だ  
不付け此よりつへなき相ありし人とし  
家兄曰酒ハの中世も書文字もあ作れも  
ついでとよりらん志あり実件とあり名は清  
合申さきぬ何き当人子出して丹人と書や

ありてはるをゆいれに戲作者にありたく  
家兄をうゝぬ馬鈴あり大によりの家  
兄世終るまで侍人ついで證文をとり書也  
々家僕とありし已目録知りたるものあり  
相母公中。屯の美凡の厚り全二冊他一冊  
上枚  
春朗画し今存の草屋少板を終自序し重傳  
門人とありはが家ありし  
類焼の時失ぬは草双紙大にりきてより  
年々作ありて名ありぬ。草屋子三年斗り奉  
公してし紀八筆子口ありし家兄をのみのみいと



中世もこの飯田町中坂を下駄屋と名乗る者  
店名へ八智とありし上其親を好むゆへに下駄  
屋といふやうなりしと常よりいひけるに薩翁の門人と  
ありし出精して少くも其意を悟るに下駄屋  
代にめりしやうして多智の指角代をいふに  
戲作代をいふに娘小智をとりわがまをいふに  
降彦去に死家の医師の女目代買ひとり宗  
伯と名乗せ下谷字小庵屋横町といふ所の玄  
關付の泉と名乗ひて同位せしる多智年の召

著述也いふ泉内の口をいふなりはりし一子  
宗伯死す前して天保十一年秋書画倉地を  
しりたり時為書のあつたり書画倉乃金せぬ  
とてつりし女士の名跡のあつたり代清て宗伯  
一子よりせむを八十一才斗りあり人四十年前  
より眼病つりて盲人となりし宗伯也其死す  
る妻と名乗せしとせし字平本も口授して今に  
著述の上梓ありし一奇人といふべし  
○宗伯死去の時 文化十二年  
乙亥九月八日 馬琴へも告げし







了しと申すは、天和の御籠り起り自笑  
に、續室永正使より、馬券の三舎を、  
惜りて人より、て以初行

草双紙の變格

天明年百八番の地、如くの甚上あり、也へ  
洒落布流の御双紙も、骨響の笑ひと、  
考類、一、多し、京傳翁十九文の時、  
存名買物、全二冊板元、  
小正年四方志良、蜀山作、  
御双紙の評判記

つたや、出板あり、一時京傳翁熱巻油極上、  
あけられき、是を戲作の草紙、  
けしめあり、  
かたなり

○享和の元、め有仙笑甚、  
凡顔あり、  
少板、  
為款付子、  
戲作、







ハカクそのめのけりし世にありしものもあまふに  
さて武名世ふ多き天野三郎無清の后裔  
原宿築地 今之三郎無清のは又今隠居を其武  
傳家橋白 子のお文雅丸の主人とておの連京山雅進子作  
たりし志をくありあま日殊の糸巻とてお拍子り  
由緒ありしは八尺の拍子借見せんとありしは  
足せりしに返さきしふと入りし追加之後其三  
少書れたり哉たふ追補古文の中

一 半遊盆大鼓

寛政の頃迄ハ六寸の尺より七寸のまでを半遊也ト  
て盆大鼓と云ふもの彌高りりハ昔の盆踊りも大  
鼓をもちて踊りたりありありとありしなり  
形も縁ハ此ハ縁を紙黄し海草花をとり丹  
比ていろとり阿膠をつよく引かるかへうに聲を  
とちて柄ハ木にて墨にて塗かるものなり予もた  
ちて其の形ハ此ハ拍子盆の中尺せと  
いふふありしと見えハ形ハ此ハ拍子盆と云ふ



其の革張りを漆の塗柄へ價も以て十  
倍也  
僅に六十年ありて少少の多抱さへ  
拍巻  
の度風嘆歎と云へ

二張書

寛政以前のいふの如くハ  
嘉永横骨多く  
いれハ形くハ枚張以上  
七布骨ハ亦く  
錦指ハ京山爲本布書  
ト云々如  
ハ價も  
ト云々  
下直布一枚張十六又二枚張  
三平二孔  
四枚張八枚張一枚十六孔  
價定りてひきり

然りハ寛政八年の長鉄炮  
洲船松町子室  
家屋と云々今の如き  
子細つくハ一函指  
紙布ハ大風仕立と唱へ  
一枚張ト云々  
骨七本  
あり成書ト云ハ大子  
をやり予也  
志云ハ家  
来子  
移りてものさせ  
ト云々  
ありき價ト  
昔ハ一倍ト云一枚張  
三十三孔ト云ハ  
ハ呪書  
此風をあけさるを  
恥とせり是余の  
居宅のハ人  
々の風扇に迫き  
故人平店  
重橋弥左衛門  
町  
ト云々和泉也  
ト云ハ  
ハ室書  
屋と云ハ



佩代高へは是今の如く佩の表後より多し  
は下めあり

三たあさの始

今世船と多く用多しありと云物ハ寛政七八  
年の以一ツ橋は鍍の女中の召仕ハ婢女も二  
して有義就してものつゝた形の形子作り  
筆より用ひハ髪むひよりゆへハ異形サ  
ハ部屋方まで婢女多く用ひハ作りや粗  
形ハ故換ハやけきせしハ常子出入る小

弓物屋神田明神下は信の兵衛と云者ハあやう  
の物をとて平たあさハをあたへて作せし  
て桃ト云世に流行せしとぞ  
左の兵衛ハ予ハ件へも出入りの者ハはあやうか  
ら繁結ハ便利あり物つきて女中の方多く  
用ひたあさよりやとを予ハ女子已せハを女  
ともとのへ用おとす又あはて強りの端を  
とて不具ハ後ハき店ハ多しと云上ハ統の  
用具と多し今程強き











よふくへき近來發生の物といへりされハ文  
化年中よりのも物ありて一雷降之と何  
より也芝愛宕山の四百六十日毎年亦有  
世曰くは日中は夏おの虫の葉ありしを青  
酸時雨を高く用ひやうハ水にて鴉舌を  
ちり余指の諸人多ひて是をふはしよの記  
りハ明和年中ハ愛宕下の青杉ありて  
ち倉橋内匠其井上即延中中弓は四百六十日の  
日之人の庭掃除すく青杉よりつぎをとりて

り今日を丸呑みされハ大人ハ癪の地を切炭  
ハ出氣をさる恐ろ岩山の味も恐ろしとて戯言に  
あはれハ老をたすけりハるより起りハりとも  
近道の老人よりハのあき度もあはれハりハ  
くハり

京山ひきせは四百六十日子無宿志外多時社  
ありては青杉をばきと賣者三人ありて  
人より立つともひきしを小穴に吞さるもあはれ  
ハ所人ありて立つたるといふきて若も何しハ



中に大徳侯の重臣と又へて義堂其人の連  
 なる守虎の武士義堂の原一と春名日向の義  
 求のまじり碓氷園と水子入也なる茶碗を社に向  
 けたりき吞一とおの北條も亦て足あつて人  
 と人の互政を操はと嘆歎一なる事とけりき也  
 雑組に枝の枝に草鞋をうち振一り月日より  
 ちうし一して後子草鞋天王と牽一と云ふと  
 又へたりき事をもろ一と春名もつぎも和漢  
 古今の流るりあり

六 豪気

寛政年中松平越中守殿執政ありては改革  
 ありて天明の國併一帯一なる松平隠居少将  
 一心斎及は用當越中守殿へ吉原町見物取  
 成敗九と形介格の付立一と吉原大門の控札  
 も不相二下た具と先一と廓中を群見物一と  
 阿ふ事一と人々器量支智世不事これなる豪  
 傑人の事一と知ありてせよ水一と又へたり  
 かな人今又へて

あり日見たりと云  
 臨海上林と云類  
 巧の東福寺に集結  
 志多時以古八條茶  
 候の菩提外あり  
 心斎及の事あり  
 屏風と云一と度  
 現二字の事あり  
 力能和剛家  
 湊平の事あり  
 見ると是なり



東山曰はるる八平氏御後にも時りあるのこ  
ちとては君りも橋り依りてとすれせ駕り  
下り立りも橋りこれの家子立刀番子刀をもちせ  
これと流りし依の大勢路上に流るゝと橋  
せりせり依之去るゝく往來停りぬこれおの  
れ目撃ししれりるる

七 物經

天明の代家家の長江渡辺左衛門右衛門乃  
高家福林江左衛門の許りるる  
今ハ口家おとろへ  
賜りきりしとす

物經振舞ふ逢ひ一時林り代小價を召称  
り此ハ今日安一市沙真沙安人とす一とて立  
向りて家り又へ請りしを家りもたすはあて  
りしとてありき家り又經を好き心一お出入り者  
也常に折来りしり物經一言價之し一秋の古春  
にありてハ此太ありも價二百孔子過在今ハ物經  
も二直三直もきり古春も二百孔の折あり  
いりありあり

八 風邪流行



不圖おもしろし歩り修むりしを志のひて能く寛  
政三四年に如くあり江戸中風邪流行りて  
病きり家多し市中商人の家多し戸多し  
此月風邪有りお林中川と北を流るる家多し  
よみたり殿中白公の面を侍立減少を驚不  
苦と云今書出し程之は氏街奇多し人水にお  
あきにお世話へと云重信とやりしは風邪  
を病むる風と云くはの立春系修作等が  
の新板子はひハ上下一部おせると云たり女師深  
踐負十枚

川よりありて岩床に入き、園扇を以てあふく岩  
たりすし縹元をとりて風をひき繫子把  
さしさまののりをもて熱向く火も世より  
予も却年所持せし是も六十年のむしとあり  
ぬはひの多きことし、よ中時世ありをあらはは  
は作りたり切あまた有りぬ實政中の孝さし  
よ天下一面鏡の板所と外歌去り多し、時の執政  
越中守殿のやあめ飯板所あらむる越中  
守殿を少野望に足立とあり、の仁政あり熱向



事りかゝる事あり一松もや平に委さる一開  
松町奉州にて可改令あり一僅一年にて  
町市倉庫に事あり一改役と云新令ありて櫻上  
岡板と竹五尺に今子知り

九十八大通

棟の糸巻子十八大通の事あり松もい半にて記  
十八大通の中糸巻子二人あり一人ハ布新三ッ目  
子位せ一七百石あり松士之富鏡あり一十八通  
の糸巻子数あり一且又鷹疾を以て鼻をも失へり

一人ハ糸巻子近き辺りの築代子位一四百名の女士  
あり是も官あり一十八大通の糸巻子位年ハ賀一なる  
なり一其人ハ一糸巻子あり太学易術を志す  
一糸巻子の糸巻子十月以内来初一糸巻子の  
許もなり糸巻子年七月甲子天明終るべし  
唯糸巻子あり一糸巻子とあり一糸巻子とあり  
いつれも戲と松もいあり一糸巻子とあり一糸巻子  
さておま年暮にあり糸巻子位一糸巻子とあり  
糸巻子との松もい一糸巻子とあり一糸巻子とあり



及之... 七月... 只二日の病... 年... 父大通... 昇進も... 己上... 天野翁自化...

十 天明中 俳優

天明寛政の... 市川... 中村... 大谷...

五郎二代目市川八百蔵市川門之助... 菊之丞... 田の... 此... 委...

十一 中車死亡

安永六年の秋... 八百蔵... 中車死亡



了る引込（成り瀬川施治所）つよはせをきりぬり年  
四十三才安永六年酉七月五日戒名実盛中車  
志解淨土古ハ滋草親為院ニ以狂之中志  
十師志思平々清門（つよおのり）に遊却平々死を  
悟る時懐中より却平々戒名ありとて取出一  
ハる卷々戒名をよしおかるともいふけきん  
物子向ひおし（いふ）とて取一（た）おあしみの  
中車美（八百巻）得りありとつよまもさすは此宗旨  
の世回向願ひ外多とカ口上子尺物袖をぬりしぬ

日本より一ヤカ少紀年代地子尺之たり此物者  
焉るハ彼者甚く一カ目余志行をせ死一カ  
んはハる卷々に彼者中の美男子と婦女と一  
てゆひきせざるハあく中車うせたる物七百婦  
女の集積多く滋草近辺の志きよの花賣切  
一と名山母の物後よきぬ墓所子中車の故  
地をつけ一根のつく一多指の婦女子向の  
心と地と子あまらる（おき）とて又戒名一  
枚百足（つ）りてちよと文へ一と名近來ハ婦女



たりの初み紀ありー役者のうせれらるゝ多りり  
しよさるゝりのおろろある 披露ありーしよさるゝ  
僅に七十年斗のりふ世の人情を知らるゝ  
しゆきんしーされハ世の抱くも目かくー  
鬼こころとるべきハさるゝ 抱くもさるゝ  
さるゝ今以上よるゝさるゝ 元禄のひらハ  
十五六の女子世のりて抱くーと死鶴々  
残す又死るゝ

十一 芝居三日曆

天明元丑年四月廿五日より 市お座はて蔵物花  
万代常流二番目江戸京大坂のりを三日曆の  
ねる江の神日 お甚 菊遠 石行北異の菊遠の二  
日目 おちよ 菊遠 石行北異の結綿の三日目 菊遠  
名取門 幸四郎 石行北異の仇波上るりいつきも 富中屋  
お太夫 おちよ 菊遠 ねる仙老様田沼助之吉介の太  
当り 秋中を更行せり お甚 菊遠 以耐京山十三才  
以ておちよ長女前を更行せり お甚 菊遠 以耐京山十三才  
各自以ておちよ長女前を更行せり お甚 菊遠 幸四郎近年うせ



かなき中師父之踊りの多かりり一故七名門の  
役をさせあそむ踊り台は只うを紐しておそく様  
殺さすのよき事一きを心あけくさすかては  
とへてとりかき今ハ尺を戯場の舞うありし様  
志之し一近來徳庵南少の店ねを似若し様因り  
やうあるよきもあく後若も又能り新作のねをさす  
し解し

十三 春約乃上り

天明二年寅の正月日辰巳世小中ね座を豊前

太夫上り いり太夫 いり太夫 いり太夫 陸自念乃

瓦の八幡太師義家沢お宗十師 彌倉権五師京

政市川門之助 いり 文書の姿 宗十師ハ百々太夫の

姿布舞豊せり出り尺物きの西也 宗十師 遊地也

門之 いり 上り一上りありて尺物也

幕の方子目をそま大和屋濱野屋と口には巻るま

四師ハ宗但の妹うま菊之進うまの妹やいり

半中師ハ九郎を犯うま菊之進細面也せりたて生

年の中師ハ一も里下たの姉妹のさまふ小送



五人とも振袖紫白絹深小色糸七様の花  
ち〜〜縫模振袖八緋縹子黄縹縹の紅裏の  
切むらむらに鈴付の約既子細ハ紅白白絹深切  
幕より中白即出て踊り菊之丞出ると物の声  
雷をまじり五人義家とて花乃よと年々豊  
太夫姑者様田女作よと吉原の抱女若しをの  
美約五人の所作奇に妙にみべ〜と中白即ハ  
近年うせり大太夫とよみから中白即又菊之丞ハ  
仙女とよみ〜と若盛りの時ハ時京山十段〜と

同摺志形をいふハ時役者 宗千師 門助  
半四郎 菊丞 上り  
太夫 作者 様田 うち新の后年王様〜ハ深〜即  
菊之師多門とよみ〜菊之丞大太夫とよみ〜杜  
若延壽太夫飛屋南少子中〜ハ新〜り様  
〜とこれと〜ハ一軒の露と〜ハ劇場五人  
〜ハ〜り〜も〜教〜ハおのれ〜ハ〜ハ十二  
中〜眼の黒〜ハ〜ハ相〜様女名〜をの文句〜り  
〜ハ〜若〜京〜や山〜下子〜雛鶴〜日〜九重〜日〜濃〜京  
〜ハ〜花〜京〜日〜雅袖〜は〜と〜は〜日〜花〜三代〜若菜



霧の白露あぢのくれをい日の姿舞。都絶。あけ  
巻・瀬川杉葉。飛菊。岩系。江川。壺盤木。  
切たふいの妻日野杉葉。丸ろまー丁子の丁山同。ふ  
里や。若松日。連山日。以上廿七人いつまも時名  
の故もつりし件の所をまうたり撫女とも也  
吉原の盛りありを去るべし女の撫女とも此度  
天以 龍見せの上より名とせに入まられば此の他若  
二寅 横田法助へ御礼者へとて花扇時よ番氏新  
造花所女ありしもの女へ花扇博き出しの時より主人は名ら  
墨河同くもそ花扇のたん新子ありは花下おし花扇大工と名る

あつきのすーま子云々述い此方のこまを他を神  
あえのいりありあり女所工たららひせよ墨河くふ不  
まらひひ女所を世中より名の中一撫女廿七人  
一人三百疋の横田へ贈る時平亮とも吉原の  
梁子え廿七人女所各やりて一人若者竹をひ  
中お座二階座後七名つてまうそ一日見物一  
けろに産婦白うぬの花嫁なるかーと平兵衛街  
喧嘩くたう天照の時勢を知るべし横田は  
くはに廿金斗りせねは上より吉原ハまう人



世止りけり板元若も重三郎も通油大重は九  
りしきぬ板又九右壽十入一柳女あり一女  
郎尾今力言ハ五尾山三郎の之也呼喚着也

十四 関の戸澤瑠理

天以甲年辰雲自影みせり市お屋名歌ハ  
り相長柳之は顔之在十常盤津菊太史より  
以て積慈重関麻中町きよな板の菊之丞四位  
少将門之助関守関兵衛実ハ馬主仲菴大也  
乃今もより然り其之屋をて家と見らるるあり

佐々根田治郎あり

十五 高尾の上より

天以二寅の秋物之中都座伴達深仕形謙沢  
二番目上より望前太史土多の石哲園千郎高  
尾幽魂菊之丞上よりけり新曲高尾懺悔根  
田治郎作之は時和り以家ハ横田家元京伴着  
のまゝ之有りは程上以横子居つけしなり時代  
高政若子高尾の上より文句ありやを  
綴りし事ハ布書ヲ下と許と見之とを懐中



尸小菊残子あり〜と書きたる事傳見その秘人  
あいつの楽いやくその字のあをけりむい酒香ぬ  
月とあふはさあ〜もやあは袋まふ〜と云ふ  
玉のや〜あ〜むい酒香ぬと云ふ二の碑せぬと  
あ〜はいつ〜あ〜人と云ふれは横田漆を打て然〜  
とて家兄の机上の筆をとるとて即座に黙然せり  
此時系山傳子居る見たり是れ以上をさき  
記すおとひ出〜てむり〜と云ふは横田漆助ハ  
替言き人〜をば比世十余子見たり常子あり

て家兄と親〜り〜が家兄ハは長吉系一の酒香ぬ  
と云物子妹傳あまたつ〜一紙を尾上人けり  
りも吉系一の妓女り身の上の事紙文句のたはれあり  
〜あ〜一〜か〜り〜る〜も〜能〜お〜く〜身〜后〜好〜る〜の  
信柄とも形〜人〜カ〜とて控

十六 山王祭祀

享保の系山王神田明神の祭り上屋臺と唱へ  
破風作りの四布柱物置塗は布〜は内上草  
花人形を〜さ〜の錯り相を解〜て擔ひぬ







此の爲に其のまゝの  
形に  
子切の手に紐がけりしを  
しを免たりとハ  
松  
杉  
多  
く  
あ  
り  
也  
也

十七 祭祀の万石

天明茶店の祭祀は万石と唱へて七八寸の角柱の  
丈ハ八九尺あると云ふ一上ハ横板ありて是年  
さすの錯り物と云ふ正面ハ扇の形の款を  
うり山王と大書し町名を書しあるハ氏子中  
かと書とあり是を自らの木持ありて其力量

けしんを便と云はし少くを小万石とて子佐おし物  
し物祭祀近より夜中角柱を柱と錯付かりに  
万石としりせぬ使客も万石の柱言ふと云  
ありくおの割のまゝと云ふ大略ハはれは  
ちり紐編緋の少と一尺を志願をありて  
随ひ歩く思付事も又おれ不倣ふ天明中の凡  
俗之まて天明五年六年の既と云ふ由重橋弓所より  
後柳の大戸夜出せ町の木戸に障りて横より  
して通る程あり物之は祭祀の時祭より出り



町の使者も長崎へ参り祭礼山王警固の  
掛引足輕と口論して双方入牢の者ありに  
長崎の足輕七八人入牢の中一人剛氣の者あり  
て三言牢杖持を喰ひ長牢役存存此系り  
を名あつて杖脚子形多身之飾死也他の飯  
ハ喰ひたると云はれ長崎の役人つたへつて吟味  
中入牢の足輕ももの三言の食を牢内へ贈り  
吟味つてつ町の者三人を處置し餘一件  
の者は替の存り足輕もハ多きにさしぬ飯

城喰ハきり足輕ハ長崎中王山王五兵衛と  
吳名せしれ祿も増々といふ弘化三丙午年件の  
一件より四年丑軍年立て再び傳馬町より山王祭礼  
ハ必出する神祖 此多張の獅子と唱る掛夫の  
若の者考と句の掛引と口論打合ありて双方入牢  
ありしに長崎先例よりて入牢足輕ハ三人  
の食を給ひしと云  
吟味百日斗りしりて水換下り等の者  
傳多下り迄といふれは口論祭既人と流罪  
足輕もハ進放  
内ハ長崎ハ然き今年山王の祭礼ハ三初永長崎へ参り  
連ねしを掛引警固お止山王へ金子を奉納



あるよの風俗あり 同年の丑月  
猶記 古風多し 多し 此 他記 編作 筆 廿二  
てうち おもひ びきり を 見て 書 つけ あり

安政四丁巳年九月寫之

辨香園

淡路の風俗 安政四丁巳年九月寫之 辨香園



